

もりたなるお
後生畏るべし



もりたなるお
俊生畏るべし



講談社

〈著者略歴〉

一九二六年東京生まれ。警視庁巡査を経て、近藤日出造門下。二科賞及び二科漫画賞。第23回小説現代新人賞。第19回オール読物推理新人賞。「真贋の構図」「画壇の月」「無名の盾」「大空襲」で第84回・95回・97回・100回直木賞候補。『漫画謝肉祭』『警察官物語』『真贋の構図』『横綱に叶う』『忠臣蔵の繪』等の創作集と「抵抗の器」「相撲の骨」「羽根」その他の短編多数。

こうせいおそ
後生畏るべし

(非売品)

第一刷発行 一九八九年十月四日

著者 もりたなるお

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社 講談社



〒112 東京都文京区音羽二―二―二二
電話 東京(〇三)九四五―三三(大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

製函所 株式会社岡山紙器所

© NARUO MORITA 1989, Printed in Japan

目次

第一章	松陰先生の鷹	5
第二章	松下村塾	36
第三章	懸案の儀	91
第四章	士族の反乱	133
第五章	開化どんぶり	162
第六章	忠孝亡ぶ	190
第七章	内閣崩壊	220
第八章	法典の戦	239
第九章	帰りなんいざ	260
あとがき		280
略年表		282
系譜・系統図		295

装 装
幀 画
熊 佐
谷 多
博 芳
人 郎

後生こうせい畏おそるべし

第一章 松陰先生の鷹

(一)

嘉永六年（一八五三）九月半ばに江戸を発ち、長崎まで足をのばした吉田松陰は、浮かぬ顔で、生地かえいの萩郊外松本村に帰ってきた。同年十一月十三日のことである。

長崎行には、重要な目的があった。長崎港にロシアの軍艦が開港を求めて停泊していると聞き、松陰は一計を案じたのだ。

「漂流と見せかけて、ロシア軍艦に救い上げられれば、海外渡航ができるかも知れない」漂流民ならば、たとえ外国に出ても、国禁違反の科とがを受けることはないであろう。

海外にあって新知識を学び、世界に開く目を持ち得るならば、必ずや日本の将来に役立つ。松陰の心には、日本の新知識となつて、立国の支柱たんとする情熱が滾たぎっていた。

巨大な外国船が、しきりに出沒して、開港を求めている。鎖国をつづけた日本は、外国の事情がさっぱりわからない。交渉を求める相手に、どのように応じるべきかの、対策もない。鉄の船と大砲を見て、要路の人たちは、ただうろたえるだけである。空砲の音に驚いて腰を抜かし、寝

たぎりになった土もいるという。

徳川の幕閣も、諸藩の重臣も、埒のあかない小田原評定を繰り返して、無為に日を送っている。

吉田松陰は、居ても立ってももられないのだ。

「夫れ外夷を制馭する者は、必ず夷情をうかがう」「彼を知り己を知れば、百戦殆うからず」情報がなければ、攘夷も空念仏に等しい。

「急ぎ長崎へ」

彼（外国）を知るためには「漂流密航策」以外に方法はなかった。

松陰が捨て身の覚悟で長崎に着くと、ロシア艦隊は去ったあとだった。

万事休す。江戸から長崎への急ぎ旅は徒労に終わった。萩へもどつて機会をうかがうよりない。

馬関（下関）をへて、萩に入る松陰の頭上遙か高く、一羽の鷹が舞うのが見えた。

松陰が松本村の自宅に着くと、鷹はその頭上を旋回し、唐人山に向かって滑空していった。

頂近くに姿のいい松があり、鷹はその枝に翼を休めた。

松陰は、嶺の松籟を聞きながら、目を閉じて佇んでいたが、家のなかから妹の文が心配を感じて顔を出し、

「あれ、まあ、兄上さま」

と驚きの声を上げると、目をあけて軽くなずいた。

小さな旋風が起き、落ち葉を巻いて松陰の足もとを襲った。

急き立てられるように、松陰の足が敷居を跨ぐ。

「父上をはじめ、家の者はみな達者ですか」

「はい。息災でございます」

文の顔は上気していた。

(二)

唐人山が冬陽の鈍い光を受けて、萩の城下を見下ろしている。

山はところどころに岩肌の露出を見せて、厳しく寒々とした光を放った。

頂上近くの枝ぶりのいい松に、数日前から鷹が棲みついている。松陰の帰郷と、軌を一にするかのような出現であった。

鷹は、日になんどか、住処を飛び立って、萩の上空を周遊した。

唐人山の麓には、陶人たちが住んでいて、終日、轆轤を回し、萩焼の窯を焚いた。陶人は、文禄の役に出兵した毛利輝元が、朝鮮から連れてきた、帰化人の子孫である。

陶人たちを連れてきた毛利輝元は、天下の実権が豊臣から徳川に移る際に、豊臣方に与して敗軍の将となった。

毛利家は、百二十万石の大封を、三十六万石に削減され、藩主は芸州の本拠を追われて、日本海に面した漁村に押し込められた。萩の地がそれだ。

苦心慘澹して城を築き、家臣ともども移住してから、二百五十年の歳月が流れた。

唐人山の住処を飛び立つた鷹の目は、萩の地形をとらえる。

三方を山に囲まれた盆地である。海に面した西北が、片口銚子の注ぎ口の具合になっている。注ぎ口に当たるところに、城が見える。萩城である。指月城しづきぎとも呼ばれている。城は、追い詰められて、いまにも海へ落ち込むといった感じである。

中国山地から流れ出した阿武川が、萩の盆地に入って二分されている。左に流れるのが橋本川で、右に分かれているのが松本川である。

萩の城下は、二分した阿武川の流れに包み込まれる形で街を形成していた。

そこには、藩主の居城がある。重臣の邸がある。中級、下級武士の家もある。萩城や重臣の住まいは別として、中級、下級の武士たちの家々をめぐる土塀どべいや石垣の多くは、傾いたり崩れ落ちたりしているのがわかる。

萩の上空に翼を広げる鷹の目は、松本川を越えて点在する家々もとらえる。

郊外には、城下からはみ出た家臣も住んでいる。

長州藩は、財政上の理由から、中級、下級の家臣に開墾を奨励した。開墾した土地は、給地として自分のものになる。

松本川を距てた松本村の多くは、そうした家臣団の開墾地であった。

畑で麦を踏んでいる人、粗朶そだを背負って山道を下りてくる人、小川で菜を洗う人。それらの多くは、常勤につかない半士半農の家臣と家族たちだった。

諸国遊学から、久し振りでどった吉田松陰の生家も、農耕による自給自足の生活を余儀なくされている。

本編の主人公山田顯義（幼名市之允）も、松本村の唐人山近くに生まれた。

倒幕の途中で斃れた吉田稔麿、松浦松洞。維新政府の枢要な地位についた品川弥二郎（内務大臣・子爵）、岡沢精（陸軍大将・侍従武官長・子爵）、落合濟（元老院議員）、岡市之助（陸軍大臣・男爵）等も、松本村に生まれた。

維新政府で初代総理大臣となった伊藤博文も、仲間の子としてこの地に移り住んでいた。

冬の薄陽が、松本村を照らしている。村童が群雀を追って走る。陶人の窯から立ちのぼる煙が、唐人山の山裾に棚引く。

鷹の目がとらえる地上には、武士とは名ばかりの人びとが、瘦地へ取りついて暮らしていた。鷹は飛翔の輪を城下の街の上まで広げたが、一直線に飛んで唐人山の住処へもどった。陽が沈むのだ。

萩城が影絵をつくった。影絵はやがて夜の闇に溶けて、姿を没する。

月の出がなければ、城は闇のなかに消えたままである。

夜になって風が出てきた。松籟が上空を駆け抜けていく。

松本村の家々から、素読の音が漏れてきた。

「王子塾問いて曰く、士は何を仕事とする。孟子曰く、志を尚くす」

「子曰わく、学びて時に之を習う、亦説ばしからずや。朋遠方より来るあり、亦楽しからずや。人知らずして慍らず、亦君子ならずや」

農耕に従う家臣団は、灯火を節約しながら、必死になって書物を読む。親から子へ、そして孫へと。

素読の声は、近頃いちだんと高揚の気味がある。

(三)

冬陽は、唐人山の右肩から昇って、盆地に逼塞した萩の城下とその郊外を、斜め上方から、憐れむ如く、あるいは蔑視する如く、鈍い光をそそぎながら移行した。

落日は、悲歎の夕映えを指月山へ投げかけながら沈む。これは落城の風景である。

徳川政権が樹立された昔、毛利輝元がこの地に押し込められて以来、陽は同じ軌道をめぐって、西の海に落ちた。陽が落ちるそのたびに、萩城は落城の姿を、自ら演出するかに見える。

藩主と重役は、毎年正月元旦に、城中で復旧の議を行う習慣をもった。復旧とは、長州藩を、萩に押し込められる以前の、大藩にもどすことであつた。三十六万石を、戦国大名時代の百二十万石の昔に取りもどすことである。

正月元旦、その宿願について、家老が藩主にお伺いを立てる。

「懸案の儀、いかがつかまつりましょう」

懸案の儀とは、いうまでもなく、百二十万石の旧に復することであり、徳川幕府を倒すことが、現実的課題となる。

これに対して、歴代藩主は次のように答えるのだった。

「いまだその機に至らず」

可能性の有無よりも、機会があるだろうことを前提にした、願望であつた。

願望は達せられることはなく、鬱屈のみが集積された。

松本村に、半士半農の日を送る家臣たちは、朝夕、唐人山を眺めて暮らした。目睫の間に迫る突元とした山容は、挫折しかねない精神を、鞭打ってくれた。

「いつかは、その日がくるぞ」

唐人山は、岩肌をそびやかして、そう語りかけてくるのだが、それにしても、うんざりするほどの長い年月が過ぎていく。

しかし、人々は目を尖らせていた。出口のない穴のなかにいて、藩主と家老の問答「いまだその機に至らず」を、可能性に結びつけなければ、生きていく意義を失う。

いまその出口が、仄かに見えてきた。脱出口を穿つ槌音が、幽かではあるが聞こえてくる。

出口を穿つ槌音は、黒船が轟かす大砲の音である。それは殷々として、政權担当者たる徳川幕府を脅かしている。外国船の威圧に対して、確固とした対応策を打ち出せない幕府を、諸藩は張り子の虎と看破しはじめていた。

封建制統治に破綻が見え、混乱が生まれている。

二百五十年もの長期にわたり、長州藩を抑えてきた権力が、外国船の大砲の音によって、みしみしと軋んでいた。それらの音は、辺陬の地、萩にも伝わってくる。

どうやら出口が開く気配である。

それが仄かに見えてくるのは、吉田松陰の才能に負うところが大きかった。松陰の先見の明は、実践をとまっていた。しきりと長州の外に出る。鳥の目で見る松陰の諸国見聞は、藩主への上書その他の、さまざまな方法により、開明の明かりを点すのである。

「様子をうかがっているときではない。動くべし」

吉田松陰は訴える。訴えつつ自ら動く。松陰の言動については、関心と警戒が持たれ、開明と保守の振幅の激しさに、戸惑う面があるにせよ、逼塞の出口を示す、明かりであることに間違いはなかった。

夜ごとに高揚していく素読の声には、世のなかの変動と変貌を予知した響きが感じられた。

「今夜はこれで終わりとしよう」

父親の願行あきゆきが言った。

「有難うございました」

子の市之允が頭を下げた。父子は、使い古した文机ふづくえを間に対座していた。論語の素読をしていたのである。文机は古びていて、脚に継ぎ足しがあったが、母親の鶴子の手で、黒光りがするほど磨き込まれていた。

「世のなかが騒がしくなっている。異国の船がしきりに出沒して、隙すきあらばと狙おろっておるようだ。心せねばならん」

「はい」

「お前は、洩はなたれダルマなどといわれておるが、心して勉強をすれば、そうした世間の陰口などは、いっぺんに吹き飛ばすことができる」

「はい」

「松陰先生が、江戸から長崎をまわってもどってこられた。近々に江戸や諸国の模様を、松陰先生からお聞きできるだろう」

梟ふくろうが鳴いている。すぐ近くの森にいたのだ。

「明日は朝飯の前に、木刀の素振りすぶぎをする。朝食が済んだら、裏山で薪たきぎを取る。さあ、いって休みなさい」

「お休みなさい」

「うん」

「母上、お休みなさい」

市之允は、夜なべの針仕事をする母親にも挨拶し、手洗へ立っていった。梟が鳴きつづけている。

父親の顕行は、縄をなうために土間へ下りていった。

手洗からもどった市之允が、もういちど挨拶をして、隣の部屋に入った。弟の久次郎が寝ている布団かへんのなかへ、すっと体を滑りすべり込ませた。枕を並べたところは、市之允の頭が、ひとまわり大きい感じである。市之允はすぐに、柔かな寝息を立てた。

「市之允を、洩たれダルマというのは、お止めになっただけませんか」
鶴子が夫の顕行に言った。

「……………」

縄をなう顕行は無言でうなずいた。

「市之允は十歳になりました。来年は元服もとくの歳でございます」

「そうだな」

「いまはあのように、素読にも励むし、畑仕事や山仕事の手伝いもよくします。あの子が洩たれ

ダルマといわれたのは、六つのときでございます」

「うん」

「ここ一、二年の間に、市之允はすっかりした子になりました。ですから、もう洩たれダルマではございません」

「そうであつた。つい口癖が出てしまう。これからはダルマ先生とでも呼ぶか」

「真面目なお話でございます」

市之允が洩たれダルマと呼ばれたのは、六歳のときである。そのころ市之允は、唐人山の麓の陶人の家に、よく遊びにいった。陶人が、市之允を可愛がつてくれたのだ。

六歳の正月、陶人の家に遊びにいつて帰るとき、段々畑で子供たちが風を揚げていた。

畑に入り込んでゐる者もいた。

「畑を踏み荒らしてはいかんぞ」

市之允が注意をした。風を揚げていた子供は、市之允のところより家格の低い家の者だったので、畑から出て他の場所へ移った。

これを通りがかりの古老が見ていて、市之允を褒めた。

「畑を踏み荒らす、悪戯小僧どもを追い払うとは、なかなか感心な坊やだ。うちにきなさい。飴湯をご馳走してあげる」

飴湯を飲ましてもらい、古老の家族にも頭を撫でられて、市之允はすっかり嬉しくなった。

翌日、市之允は同じ畑に出かけていった。畑を踏み荒らす子供を見つけて、注意するためだった。子供たちは、別のところで風を揚げていた。場所はよくないが、畑ではない荒地に移ったの